

トーマス・マンの「魔の山」

鎌 田 忠 男

語り手は物語の最後で、雨が降りしきる戦場に消えていくハンス・カストルプに語りかける。「われわれはこの物語のために語ったのであって、君のためにはない。じっさい君は単純だった。しかし結局は君の物語であった。」(S. 994)¹⁾——ハンス・カストルプは、せいぜい三週間の予定で、静養のためにスイスのサナトールウムを訪れた。ところがこのサナトールウムは、死と病気が支配権を握り、日常世界の秩序や風習から解放された世界であった。ところで、語り手の言によれば、ハンス・カストルプの潜在意識には以前から、人生の意義と目的とにたいする疑問が潜んでいたが、時代はこの間にたいしうつろな沈黙を続けていた、とのことである。まさにそれゆえにカストルプはこの世界の虜になり、大戦の勃発によって眼をさますまでの七年間、もろもろの人間との出会いを通して、あるいは生理学や解剖学の書物を読み、あるいはひとり考えに耽り、生と死について、愛と肉体についてなど、要するに人間存在とは何かを探究する。物語はそのような形になっている。しかしながら、物語の進展につれて、ときに、果たしてカストルプを廻って事が展開しているのだろうか、という疑問を感じさせられることがある。たとえば、カストルプを取り巻く二人の論客の論争、つまり合理主義者で道徳居士のセテムブリーニとキリスト教的共産主義を主張するニヒリストのナフタの論争は、それが激しさを増して行くに従って、カストルプの存在を圧倒ないし無視してしまう。さらに付け加えて言えば、この二人の論客は——ロシア的人間性を主張するショーンシャヤ「生」の権化ともいべきペーペルコルンについてもある程度当て嵌

まることであるが、——ありのままの人間というより、いわば典型的な人物であり、それぞれ特定の思想の代弁者のきらいがある。従って、思想の対立という面が際立ってくる。少くとも全人間的な葛藤という形で展開されているとは言いがたい。これは、「この物語のために語った」とあるように、作者にとって必要なことであつたのかもしれないが、不満が残るところであり、ひとつの物語と呼ぶにも些か抵抗を覚えるところである。

このように見てくると、作者は自己の内部でのボレーミクにもろもろの登場人物を宛がったにすぎないのではないか、とさえ思われてくる。マンは「カストルプは自分の高まった思考に、個人的にはまったく匹敵していない」²⁾と言っているが、この言は、その裏を返せば、カストルプの探究が実は作者自身の探究であつたことを示してはいないであろうか。

ところがそれでも、冒頭で引用したように、語り手は「結局は君の物語であつた」と述べる。推察するに、——作者はこの物語のなかで多岐にわたつた問題を提起し、それを展開させることを主眼としていたのだろうが、——物語を書き進めていくうちに、ハンス・カストルプにたいする愛着が徐々に強くなっていったことはまちがいない。じじつ語り手が眼に涙を浮かべてカストルプに別れを告げるこの最後の場面には、そのような作者の気持が率直に表出されている。語り手は「教育者の傾愛」と告白しているが、第三者が示すような愛ではなく、作者が自己の分身にたいして示す愛着であつただらう。ハンス・カストルプを単純で、精神的に白紙の状態の若者と設定したために、作者自身の思考のレベルまで高めていくには無理が生じ、語り手が補足説明するカストルプの思考内容が、結果的にカストルプそのものから遊離してしまつた面があるとはいえ、翻つて両者の心情に焦点を当ててみれば、その類似性を窺い知ることができる。そこで次にカストルプの言動とその背後にある心理状態を辿りながら、作者自身の内面との関連を探ってみる。

第一次大戦中の混沌とした社会情勢のなかで、その渦に巻き込まれたトーマス・マンは、気にかかっていた政治問題（同時に個人的問題でもあった）に結着をつけるために、『魔の山』（1924年）を中断し、『非政治的人間の考察』（1918年）の執筆に専念した。そのころ、マンは『魔の山』について次のように述べている。「それは教育的・政治的な根本意図をもった物語で、ひとりの若者がぎわめて魅力的な力、つまり死と対決してなくてはなりません。そして滑稽でかつ恐ろしいやり方で、人道主義とロマン主義、進歩と反動、健康と病気というもろもろの精神的対立物を通して導かれます。』³⁾（パウル・アマン宛、1915年8月3日）

たしかに、互いに対蹠的な二人の思想家がハンス・カストルプの教育的環境として登場する。そのなかのひとりセテムブリーニは当初からカストルプに注目して、この若者が感情に溺れて道を踏みはずすことがないように、理性と道徳を説く。かれは何よりも理性的態度を重視し、それが人類の進歩に通ずると信じている。根は臆病で感じやすいが、人柄は温厚かつ善良である。ただしその思想に底意はない反面、人間にたいする洞察力に少し欠ける。それでかれの楽観的な思想は論敵のナフタに烈しく攻撃されることになる。カストルプはセテムブリーニの説教の教条主義的なところに気がついていたのであろう。セテムブリーニの話が有意義なことは認めても、人間的に信頼を寄せるまでには到らない。

他方ナフタについては、その素性が、カストルプが出会った人物のなかでただひとり、かなり詳細に描写される。作者は、ナフタの人となりとその過去の苛酷な境遇のせいでもあることを言いたかったのであろう。この天賦の才はあるが、分裂気質で冷徹な男は、人間に内在する残虐さと悪徳と弱点を容赦なく暴露し、セテムブリーニの信奉する道徳と合理主義と進歩の概念の曖昧さを指摘する。論理のひとつひとつは鋭く、正鵠を得ているとも言えるのだが、残念なことに、ナフタは本来矛盾を内包した人間存

在の一部分を抽出して論駁している。心を開いてその全体を眺めることはしない。カストルプはナフタの思想に含まれている悪意を感じ取り、しかもその悪意が「次第にあらゆる節度を、そして精神的に健康なひとの境界をじつに頻繁に越えることを認めないわけにはいかなかった。」(S. 958)

二人の議論の果ては決闘となる。この場でのセテムブリーニの見え透いた殉教者的振舞いに対して、ナフタは自己の名誉を保つために自害する。カストルプもこの事件に居合わせたのであるが、傍観者にすぎなかった。だいいちカストルプはなぜ二人に決闘をする必要があったのかを理解していない。二人の対立は政治的色彩を帯びた単なる思想の対立とカストルプの眼には映っていたようである。トーマス・マンはやむにやまれぬ気持から『魔の山』を中断し、『考察』に取りかかったと言うが、その執筆途中にしてもう既に、論争に深入りしたための精神的疲労と後悔を告白している。⁴⁾このような作者の心理が二人の論客にたいするカストルプの態度に反映している、と見るのは考え過ぎというものであろうか。それはともかく、カストルプはセテムブリーニと初めて会ったとき、助手のクロコフスキーについての印象を問われて、「僕は人びとをじっと見てからこう考えます。それでは君はそういうひとか？ まあいいだろう、と。」(S. 92)と答えた。結果として、セテムブリーニもナフタもこのように判定されたことになると思う。二人とも、カストルプという一個の人間の内面にまでは感化を及ぼしていないのであるから。

ハンス・カストルプは生まれつき受身的な性格だが、その人間形成に関して、二人の思想家に限らず、その他のサナトーリウムの人たちもいったいどれほど与っていたのだろうか。規律と服従を重んずる一途な性格の従兄ヨーアヒム・チームセンはむろんのこと、他人の心の動きによく気を配る非ロマンティッシュなベーレンス顧問官も、カストルプに影響を与えた様子はない。

人生の意義と目的にたいするカストルプの間は、サナトーリウムに来て以来、その意識の底から浮上しつづつあった。かれは人間の存在について考えをめぐらした。そして雪の山中で人間の未来を暗示する夢を見、答を掴みかけたわけだが、眼がさめると、もう夢に見たことはほとんど憶えていない。そして人間にたいする好奇心も——ひとびとにたいするカストルプの振舞いは紛れもなく誠実なのであるが、その端々に探究の姿勢がちらついていた——ついには薄れて、かつてのような怠惰な状態に陥り、ひとりトランプ遊びに現をぬかす。最新型の蓄音機が社交室に備えつけられると、今度はレコードに熱中する。カストルプが好んだ盤のうちで『菩提樹』が特に重要な意味をもつ、という語り手の説明があるけれども、これも夢の場合と同様に、余りに象徴的で、カストルプの内面の変化を意味するにしては具体性に乏しい。従って、たとえそこに深淵な意味を籠めようという意図が作者にあったとしても、作者の認識はまだ中途であったのだらうと判断せざるをえない。

カストルプは物語の最後で山を下り、一兵卒として戦地に赴く。これは果敢な決意であり、かなり自分の立場を意識した行為であることは認められるが、サナトーリウムでの探究を通してこのような挙動に出たとは考えにくい。カストルプはまだ平地にいたころ、しばらく自分の志望が定まらず、ひとの勧めで造船の仕事に就くことに決めたのだが、決めてしまうと、それが自分に適した職業だと考えた。そして「仕事にたいするかれの敬意は宗教的なものであり、かれの知っている限りでは、疑問の余地がない性質のものであった。」(S. 53) このように語られているところから、カストルプはサナトーリウムに来る前から、附与された運命をすすんで受け入れ、いわばその枠内で、自分の義務を果たそうという意志をもっていた、と言えるのではないか。つまりハンス・カストルプの行為は本質的に運命を甘受する姿勢と義務感によって貫かれている、と思うわけである。

カストルプの内面についてももう少し詳しく見るために、次にカストルプとクラウディア・ショーシャおよび彼女が連れてきたペーペルコルンとの出会いを取り上げる。なぜなら、とりわけこの三人のかかわり合いのなかで、カストルプの内的資質が露呈され、しかもこのかかわり合いは、極言すれば、魔の山でのハンス・カストルプにとって唯一の体験であり、さらにこの場面には作者がその人間を覗かせている、と筆者には思われるからである。

マダム・ショーシャの症状は比較的軽く、コーカサスの向うにいる夫と別居しているのは、健康上というより主に精神的な理由に拠る。つまり自由を求めて心の趣くままに放浪しているのである。ショーシャの動作には投げ遣りに見えるところがあり、それで、「自由よりも秩序を好み」、風習と行儀の良さに馴染んでいたカストルプは、はじめひどく腹を立てたのだが、いつの間にかひきつけられてしまう。ショーシャをただ自堕落な女と決めつけるわけにはいかない。思索以前の素朴な考えからなのかもしれないが、ショーシャは感情に素直に従い、現実の生活を尊重し、その実際の生活における「人間的」なことの大事さを主張するのである。しかしカストルプの方は、自然な感情が生じてきたのに、内部疾患のため母親としては不適格な女に気が惹かれるのは意味がなく理性に反している、といったことを考えたり、その理性と良心の抵抗を受け、内心では当初からこの女と「実際には、つまり、心の中だけの秘かな間柄以上のかかわり合いをもつことはできない」(S. 202) という確信を懐いていた。カストルプの心の中には、自由に愛し合うことが許されるような世界への憧憬が当然潜んでいた。そしてそれが秩序や風習から解放されたサナトーリウムにかれが留まる一因ともなっていた。ところがカストルプは、酔いに任せて思い切ってショーシャに近づいてみたとき、「このような夢をもっと早く見ることは、それほどむずかしいことではなかったでしょう。」(S. 469) と揶揄さ

れたように、憧れに実際に身を委ねてしまうことにたいし、不安と恐れを感じていたと思われる。セテムブリーニが警告するには及ばなかった、と言えるであろう。

カストルプとショーシャがはじめて言葉を交した晩のその翌日、ショーシャは旅に出、何年か後に戻ってくる。このとき一緒に来たペーベルコロンという名の中年の男は、観念を筋道立てて話すことが不得手だが、実務には通じている。かれは「感情」が、有体に言えば、女を陶醉させるための男の欲望が男にとって人生の意義であると同時に義務でもある、と考えている。情に脆いショーシャは半ば同情からこの男に従っているのだが(かれはマラリア熱に罹っている)、一抹の不安も感じていた。ショーシャが危惧していた通り、ペーベルコロンはある夜中、猛毒の入った精巧な注射器で自殺する。ペーベルコロンは、カストルプとショーシャが実は互いに愛情を懐いていることに気づいたものの、もはやカストルプと張り合う体力もなく、また自分にとって唯一の拠所であった「感情」の衰えを自覚し、絶望に陥ったのであろう。ショーシャがペーベルコロンを伴って現われたとき、カストルプは内心かなり動揺したが、しかしすぐ気を取りなおした。ショーシャとの仲をペーベルコロンに指摘されたときには「このような状態に陥ったひとはだれでも、彼女のご主人の例に倣って、以前のことにしても、今後のことにしても不平を言わないのがよいでしょう。」(S. 846) ともののわかった風な言い方をしている。語り手も「悲惨の奈落はかれに関係なかった。」(S. 797) と述べているように、カストルプには冷静さあるいは成行き任せのところが窺える。しかしこの態度の裡では、前述した夢や憧れに没頭することを恐れる気持が——カストルプに言わせれば、理性の抵抗かもしれないが、——多分に働いていたのではなからうか。とにかく感情に正直なショーシャは、カストルプのこのような性格に自分とはどうしても融け合わない異質な面がある、とみていたはずである。

従って、ペーペルコルンの自殺後ショーシャはサナトリウムを去っていくが、ペーペルコルンの思い詰めた行為をまのあたりにしてカストルプと別れることを決意したのであろう。

ショーシャが去った後、カストルプは悟性と感覚が鈍麻して虚脱状態に陥るが、悲嘆に暮れている気配はない。社会の規律・習慣に囚われないショーシャのお蔭で、カストルプは、現実には叶えられないと思っていた愛に、一度だけだが耽ることができた。しかしカストルプの愛は情熱と言えるものではなかった。それどころか、見方によっては、いつきの気紛れ、中途半端な戯事と取られかねない面がある。一途にショーシャ夫人に思いを寄せ、またショーシャとカストルプの関係を大いに気にかけるペーペルコルンの方が、ある意味では人間的である。それゆえに、「感情」に絶対的な価値をおいている男が、その「感情」の減退が原因で自殺するという一種の自己撞着はカリカチュアでもあるには違いないが、愛を、そして人生を抜き差しならぬものとみているこの行為は、カストルプに対する抗議ともなりえる。しかしカストルプ自身には戯れのつもりはなかった。これまで見てきたように、カストルプの言動は、自然な感情の発露とは対蹠的なものによって、ひとことで言ってしまうと、倫理的なものによって支配されている。それがカストルプの人間を形成している。このようなかれの性格が三人の関係の結末に与っていたということになる。

「生活をまじめに営むこと」を父親から受け継いだ、とトーマス・マンは言っている。⁵⁾ 自伝的短篇小説『トーニオ・クレーガー』(1903年)の主人公は一時淫蕩に耽ったことがあるが、その間、心の底では放埒な生活に馴染めず、嫌悪感を懐き続けていた。このような性向は、「私は本能と信念から、家族の息子であり、家族の父親です。」⁶⁾ (C. M. ヴェーバー宛、1920年7月4日) という言とも繋がる。トーマス・マンにとっては秩序志

向あるいは素朴な倫理性といったものが、その内面のいわば不可欠な構成要素となっているのであろう。ふとしたことから美に耽溺し、自制心を失ってしまった芸術家グスタフ・フォン・アッセンバハはコレラに斃れ、他人との交際を断ち、孤独のなかでただひたすら憑かれたように仕事に励む助教員ラウル・ユーパーバインも破滅した。そもそも人生には、どうしても本能やデーモンや非現実的な夢といったものが絡んでくるものである。このことはマン自身十分に認識していたが、逆に、このようなものには人生から脱落する危険が潜んでいること、それが人生のひとつの掟でもあることをそれ以上に認識していたのではなからうか。

トーマス・マンは比較的恵まれた境遇にあった。身の破滅を引き起こしかねない危機に見舞われることはなかった。それは認められることであるが、危機は外的状況と個人の内面との密接な関係から生ずるものであり、外界の出来事に対する反応はひとそれぞれに異なるという点にも留意する必要がある。トーマス・マンの場合には、その精神と魂が強烈な緊張と狂気の間を彷徨することはなかったが、じつはそのように事に対処し、人生を耐え抜いた、と言えるのではなからうか。『魔の山』に着手してまもないころ兄のハインリヒ・マンに宛てた手紙では、「私の勤めは終わったと思います。たぶん私は決して作家になってはいけなかったのでしょう。」⁷⁾ (1913年11月8日)と弱気を見せ、創作への自信喪失を窺わせている。以前『トニーオ・クレーガー』を書いていたときには自殺を考えたこともあった。⁸⁾しかし「私には、》作品《ではなくて、自分の人生が問題なのです。」⁹⁾という信念のもとに、運命を甘受し、精神と意志を次第に強固なものにしていった、と思われる。ハインリヒ・マンの『ゾラ論』(1915年)が発端となってマン兄弟は仲違いをしていたが、のちに兄が和解の申し出をしてきたとき、それにたいする返書の末尾に、「苦痛ですって？ 大丈夫です。ひとは粘り強く、そして鈍くなるものです。カルラが自殺し、そし

てあなたがルーラと生涯絶交なさって以来、一生縁を絶つことは私たちの間ではもはや目新しいことではありません。私がこのような生活を惹き起こしたではありません。私はこのような生活が嫌いですが、できる限り終いまで生きなければなりません。』¹⁰（1918年1月3日）と書いている。この手紙から、心に与えられた傷はなかなか癒えそうにないこと、そして兄弟間の軋轢のその根は深いことが感じとられるが、それとともにこの手紙には、トーマス・マンの人生にたいする執拗な姿勢がよく表われている。

チームセンは病死し、ペーペルコルンとナフタは自殺し、ジョーシャは去っていった。セテムブリーニはナフタの最期に非常な打撃を受け、心身ともにすっかり弱ってしまった。取り残されたカストルプは、サナトールウムの生活にたいする興味が薄れ、無為に時を過ごしていた。探究は頓挫をきたし、カストルプの精神は危険な状態にあった。あるいは、——先に引いた1月3日付のマンの手紙を参照すると——カストルプの陥った鈍感・虚脱・無関心の状態は、かれなりの忍耐の仕方であったのかもしれない。平地に戦火が生ずると、好機到来とばかりに、志願兵として戦争に参加するところを見れば、なおさらそのように感じられる。

筆者は先にカストルプの性格が倫理的であることを述べた。このような人物は、この人間世界の現実を認識した——むしろ、重視した、と言うべきかもしれないが、——トーマス・マンの倫理的な精神からおのずと生まれてきたものと思われる。この倫理的な精神は、元を質せば生来の秩序志向に起因していた。マン自身そのような自分の性質を自覚していて、そこに含まれている一種のかたくなさに対し、いくぶん自己批判と反省をしていたであろう。それはジョーシャとペーペルコルンとカストルプの三人のかかわり合いの場面から窺えるところである。

「いったい倫理的なこととは何か、道徳的なこととは何か、——純潔と自

己防衛のことか、あるいは身を委ねること、つまり罪惡へ、ひとのからだを損い蝕むものへ身を委ねることなのか、これは私が以前心を奪われた問題です。]¹¹⁾ (パウル・シュテークマン宛、1920年8月18日) マンは自己の内面と深いかわりをもつモラルの問題について省察し、その追求は悪徳・犯罪・狂気のことと及んでいく。そしてこの非倫理的なものの克服を試みた天才をモラリストの極限と見なし、ドストイェフスキーを引き合いに出す。¹²⁾ ショーシャにも、「偉大なモラリストは美德の人ではなくて、悪の冒険家、淫蕩に耽る人、悲慘を前にしてキリスト教徒のように頭を下げることを私たちに教えてくれる偉大な罪人でした。」(S. 473) と語らせている。マンは後年(1945年)、『ドストイェフスキー論』を発表し、そのなかで、デモーニッシュな天才の凄惨な生涯とその作品に籠められた底知れぬ苦悶にたいする畏怖の念を表明している。ただしそれは真摯で率直な思いを吐露したものではあるけれども、書き手とその対象との間に、ある隔たりを感じず。モラルの問題はトーマス・マンにとってきわめて個人的なことに端を発しているが、かれが非倫理的なものをもモラルの領域に含めたときには、この問題はマン個人から離れてしまっているようである。

(1977年9月)

注

- 1) 本文中の括弧内にページ数のみ記したものは、Thomas Mann: Der Zauberberg, Stockholmer Gesamtausgabe, S. Fischer Vlg., 1966のページ数を示す。
- 2) Th. Mann: Briefe 1889-1936, S. Fischer Vlg., 1962, (以下 Briefe I と記す。), S. 232
- 3) Th. Mann: Briefe an Paul Amann, Vlg. Max Schmidt-Römhild, 1959, S. 29
- 4) マンは1916年2月25日付パウル・アマン宛の手紙に、次のように書いている。「私は憎悪、告訴、熱烈な自我感情に、つまり „戦争“ にすっかり飽きてしまい、譲歩、和平に、いや悔恨にすら、深く心が傾いています。思想は疾うにその戦いを終えてしまいました……」 Vgl. Briefe an Paul Amann, S. 39

- 5) 1939年6月29日, A.E. マイヤー宛, Vgl. Th. Mann: Briefe 1937-1947, S. Fischer Vlg., 1963, S. 100
- 6) Briefe I, S. 178
- 7) Thomas Mann Heinrich Mann Briefwechsel, S. Fischer Vlg., 1968, S. 104
- 8) 1901年2月13日付ハインリヒ・マン宛の手紙に「春が来れば, 僕は精神的に非常に動揺した冬を経験したことになるでしょう。真剣に練られた自殺の計画とともに, じつにひどい抑鬱が, 筆紙に尽しがたい, 純粹で思いがけない心の喜びと交互に生じたのです」とある。Vgl. Briefe I, S. 25
- 9) Th. Mann: Betrachtungen eines Unpolitischen, Stockholmer Gesamtausgabe, S. Fischer Vlg., 1956, S. 97
- 10) Thomas Mann Heinrich Mann Briefwechsel, S. 114
- 11) Briefe I, S. 181
- 12) Vgl. Briefe I, S. 181 (1920年7月28日, シュテファン・ツヴァイク宛)

„Der Zauberberg“ von Thomas Mann

Tadao KAMATA

„Der Zauberberg“ ist nicht immer die Geschichte von Hans Castorp, dennoch sagt der Erzähler am Schluß des Romans, es sei zuletzt seine Geschichte. Zeigt das nicht die Neigung des Erzählers zum „unheldischen Helden“ und damit sozusagen die tiefe Anteilnahme des Dichters an seinem Ebenbild? Denn zwischen ihnen besteht eine gewisse Ähnlichkeit. Sie zeigt sich, wenn wir das Innere, insbesondere das Gemüt Hans Castorps mit demjenigen seines Schöpfers vergleichen. Daher wird es in diesem Aufsatz versucht, Hans Castorps Äußerung, Betragen und Gemütszustand zu betrachten, und dann die Beziehungen zum Dichter selbst zu erforschen.

Der Dichter hatte die Absicht, durch die geistigen Gegensätze Hans Castorp zu führen. Freilich dem Helden begegnen im Zauberberg verschiedene, merkwürdige Menschen und Ereignisse. Aber es ist zweifelhaft, ob er dort oben menschlich erzogen wird. Der Verfasser nimmt an, daß Hans Castorp keine innere Entwicklung

zurücklegt, mit anderen Worten, sich nicht verwandelt. Sein ganzes Leben hindurch ergibt er sich in sein eigenes Schicksal: aus einer Art Pflichtgefühl. Und solch eine Haltung Castorps besteht in der eingeborenen Ordnungsliebe. Seine innere Disposition stellt sich bezeichnenderweise in seinen Begegnungen und Gesprächen mit Chauchat und Peeperkorn dar. Solche Castorp-Gestalt ist nicht anders als die Reflexion des moralischen Geistes von Th. Mann. Dieser Geist kommt eigentlich von der inneren Disposition des Dichters her, und der Dichter selbst hätte auch seine Beschaffenheit etwas tadelnswert gefunden.

Th. Mann hatte für das Problem der Moral besonderes Interesse. Und er erweitert das Gebiet des Sittlichen, und will das Unsittliche darein einbeziehen. Dabei wäre es aber für den Dichter kein persönliches Problem von reiner Art mehr.